



18:31分やっと虹橋空港を離陸。さて、今回の旅のもう一つの楽しみは、実は2年前から留学生の陳小姐に習ってきた中国語会話がどの程度ネイティブな言葉として中国人に通じるか、ということでした。僕の記念すべき最初の会話は悲惨な結果に終わったのであります。

……機中が少し寒くなりました。福岡〜上海間は最初からとても立派な膝掛けが用意されてましたが、国内線にはなかったたので、意を決して傍に来たスチュワデスに言いました「われ(我)欲す(要)膝掛け(毛布)」「ウォ ヤオ マオジン」とてもよく理解した。そんな顔でスチュワデスの小姐(中国では若い女性のことは容貌に関係なくこう呼びシヤウジン)と行った。「成功!」とほっとしているところに小姐が持ってきたのは何と、3〜4部の新聞であった。新聞は確かバオジィと言った筈だー今更「フヤオ(要入らない)とも言えず。シエシエ(謝謝)と言ってしまった。僕は膝をさすりながら、全然分らない中国語新聞をしばらく見続けるはめになった。隣の席にピーカン氏が居なかったのがせめての救いだっただ。

上海虹橋国際空港着 13:35(時差1時間なので航行時間は一時間三十分)空港での待ち時間が2時間もあるので、近くの上海動物園にでも行くことということで、孫悟空のモデルになつて金色の猿を見に行った。入園料は15元でした。

成都

成都には何年も前から思い入れがあった。今回の旅も計画段階から三峡ツアーという事で重慶からスタートしても良かったのだけど、成都をもっと知りたくて2日間の滞在を計画した。

中国国内を旅する場合、成都市は昆明・大理にも、そして西安にも列車で移動出来

る。チベットのラサもここから飛び立つことになっている。近くには中国一の人気スポット九寨溝、黃龍があり、峨眉山がある。そんな訳で楽しみにしていた街である。

人口1億の千万人を抱える四川省の省都である。古来より天府の国と呼ばれてきた。

又、古代から巴(今の重慶)の国と蜀の国に分かれていた。

益州(今の四川省)の劉璋(りゅうしょう)を攻めた蜀の国の劉備が蜀漢を建国し、天下三分の計の一つとして名軍師・諸葛孔明と共に中国統一を目指したのは、今から1800年も前のことであった。

今、成都是市街地人口300万の大都市である。

イメージとして抱いていた空はどんよりとし花曇りのような状態で太陽は見えないけど、その代わり街は緑あふれる、歴史のまち、そんなイメージだったが、実際とは違っていた。街中、地震の跡のように瓦礫がいっぱいなのに驚いた。

市街地全体がスクラップビルドの最中なのだ。一瞬、「黄砂がここまできてるんだ。」と、思ってしまった。旅人としてはいい時に来た。と言ったのが実感だった。

武漢にもあったけど毛沢東のテカイ銅像が公園の中心に建っていた。文革後、殆ど取り壊され残っているのが珍しいぞうだ。

明日は朝から成都の北約40キロのところにある博物館。三星堆博物館に行くことになっている。

予定としては、武侯祠や杜甫草堂にも行くことになっているが、望江楼と竹子公園の竹も見たいし、百花潭公園の蘭も時間があれば行って見たいところである。

ツアーと別行動をとってピーカン氏と二人なら、タクシーを使えば何とかなるかも知れない。

今夜は旅の楽しみの按摩でも・・・とピーカン氏と意が通じた。



早速、5楼の花園（エレベーターの中のカラー案内で見ていた）へ行ってみた。飛びつきの小姐按摩たちがニコリ迎えてくれた。部屋にも来てくれる（何とか通じた）と言つので「11時にシィーイィーディエンジョン リャンガア 二人来て」と言つて部屋の戻つた。

そもそも僕が本格的に中国語会話を勉強しようと思ひ立ったのは実は按摩がきつかけだった。

中国を旅したことのある人はもうご承知の通りツアーから離れない限り、周囲は日本なのだ。

中国人ガイドに始まつて、行く先々のみやげ店から風、晩のレストランまでかかりの給仕が流暢は日本語を話してくる。勿論、営業のためである。

初めての中国の時、僕は20ぐらいの基本的中国会話を必死で暗記した。

そして初めてネイティブ相手に発した言葉は多少銭ドーシャオチェン「これ幾らですか？」だった。

見事に無視されたのだ、北京で早朝に友人二人で公園に太極拳をしに行った時に露店で売っていたパンを買つた時だった。声が出す四声も全く無視した発音だったのである。

次の旅の時は NHKテレビ中国語を数回見て 四声を少し学んだ。

例によつてツアーグループと円いテーブルを囲んでの夕食の時だった。

そろそろ最初のビールがなくなる頃、僕は給仕娘に声をかけた。「シャウジエー」今度は声が前に出た。

小姐が笑顔で来る。すかさず次のフレーズが出る「ザイ イーピン ピィジョウー！」（ビールをもう一本持つてきてー！）小姐が短く何か喋る

、この時は大体「ビールは何ビールにしますか？」と銘柄を訊いているのだ。

分つた顔ですぐ答えるとよい「チンタオ！青島ビールください。」時にあるケースとして、「このあと小姐が「……………」として……………」ととても長い中国語を喋ることがある。

これは一瞬パニックになるケースだが、決して慌てることはない。

僕の経験では80%これはこう訊いているのである。

「お客様、最初のビールはサービスですけど、今、注文されたビールは有料に

なります。よろしいですか？」と言つているのだ。だから慌てず、首を立てに振りながら

「ツイ 対！」または「ハオ 好」と答えればよい。周りのグループからささやかな羨望の眼差しを感じる瞬間でもある。

そしてこの次は「……………」も分るように勉強しよう。と向学心の湧いてくる瞬間でもある。

……話が脇にそれてしまった。（僕の悪い癖である）つまり、われわれの実践会話は事ほど左様になかなか巡つて来ないのです。

そんな中で最大の会話の必要空間が按摩施術時といえます。

まあ、彼女らのうち99%は日本語が全く分らない、なかには英語を喋れる娘もいる。

そんな小姐はだいていが女子大生按摩である。時には按摩もときもいるが正真正銘の按摩をしながら風、大学に通っている小姐も多い。

一番最初にしてもらつた西安・長安城堡大酒店の可愛い小姐・ルウとは、「リーベレン？アナタ日本人？」とにっこり笑顔で言われて、思わすうなすいてしまつたが最後、沈黙の世界になつてしまつた。

何か意思の疎通を図りたいのだが会話が出来ない。ハイと言つ言葉に窮してしまつたのである。英語ならイエス、フランス語ならウィじゃないか、それなのに中国語で知ってるのはニハオとシェエだけ、あとはにわか勉強で覚えてきた言葉も、相手に四声を無視しては通じないのだから、

45分間の沈黙で、あとはときとき眼が合つては微笑み会う。

これはきつことだった。

結局、筆談と相成つたのである。名前も、年齢も、住まいもそして趣味まで……ところが想像してみてください。相手は腰や、足を揉んでるわけで、僕の書く漢字に返事を書くとするとうなるのか、こちらは200元（当時3000日本円、今は3300円）の金を払っているのだ。

……僕が会話の勉強を始めた最大の理由は按摩をしながら小姐と会話を愉しむことだったのである。

初めの頃に、やりとりしたメモの公開（先頃、鈴木宗男と外務省で話題になったが）してみると、面白い文字が結構残っている。

「君世界一美女 君傾国美人 君億萬円 我独身 年四十。」「君年齢？」

「我熱愛汝 我欲汝現在」すかさず小姐が書き返す。

「恣是一只大色狼！！」たまには英語の文も混じる。

「Don't be afraid. I am not a wolf. I am gentleman」

さて、話は成都喜來登（シエラトン）飯店の1803号室へ戻る。

11時が2分も過ぎないうちにドアのチャイムが鳴った。

按摩中の写真は差し控えさせてもらうけど2人ともなかなかの美人娘だった。

僕の会話はかなり上達しているのか横で一絡にして貰っていたピーカン氏が「聞いていると中国人同士で話してるみたいだよ」といつてくれた。



書翰 匣 載拙阻匯軟筆一 鋒状阻

嬉しかった。けど、ヒアリングに欠点がわかるだけに

嬉しさ少々。

按摩はとても上手で、隣のピーカン氏は途中の段階でい

びきが聞こえてきた。

そのうち、僕の意識も朦朧としてきた。

このまま二人とも眠ったら大変なので、習ってる限りの中文を思い出しては口に出して、通じるか試した。

「ジンティエン ウォ ヘン シイラ（今日はとても疲れたヨ）」

「スイジャ〜ラー！（眠い 眠いヨ）」

「イイ チイ チユイ スイジャ〜ラー！（一緒に眠りたいなあ〜）」

小姐が口を尖らせて「不好 不好 ブハオ ブハオ（駄目 駄目）」と答えたのでしっかりと通じていたようだ。こうして、僕の生きた中国語会話第一日は終わった。

三星堆博物館

広漢市の郊外に昔から3つの巨大黄土堆があり、三星堆と地元で呼ばれていた。

1986年、ここから約3000年前の祭祀跡が発見され、青銅器、玉石器、金製品

象牙など、千点以上の文物が出土した。

縦目の青銅器仮面に代表される様式は、漢民族と系統を異にする古代少数民族がこの地で独自の高度文明の花を咲かせていたことが証明された。



この一風変わった造形の青銅器

は古蜀国の政権構造や社会形態を物語るものとして注目を集めた。三星堆の出土文物は万物には霊が宿ると信じた古蜀国の人々の精神世界と、豊かな世界観を現代人に静かに語りかけている。

武侯祠と三国志(蜀)

関羽は張飛と共に三国志に於けるヒーローである。

西暦200年、劉備が曹操の攻撃を受け、袁紹に頼って落ち延びた時、下江の守りを任されていた関

羽は、そのため曹操軍に降伏したけど、曹操は関羽を丁寧に迎え入れ、「私と共に行動しないか？」と申し入れたが、劉備との「義」を重んじて、これを断った。その上で、曹操と共に白馬の戦いに出陣し、顔良（袁紹軍の大將）を斬り、曹操への「義」を果たして劉備のもとへ帰った。

ここから生まれた「義人」関羽のイメージが、のちに小説や戯曲によって中国人の人気を集め、神として祀られることになる。

211年、要請を受けて、蜀に向かった劉備は四年後成都の制圧に成功するが、魏・呉・蜀三国の係争の地・荊州を、関羽は一人で守りぬいた。

張飛とともに「兵一万に相当する」と称されたが、陳寿が「剛勇にすぎて人を見下し、身の破滅を招いた」と評したごとく、魏・呉側に性格的短所を突かれて、墓穴をほった。

最後は魏の司馬い、呉の呂蒙、陸遜らの策謀によって、息子関平ともども捕らえられ殺された。

一方の張飛は、「暴にして恩なし」と陳寿に評されたことへ、2021年、関羽の仇を討つべく呉討拔軍が出撃する間際、部下の張達らに寝首をかかれた。

眼が大きかったので閉じて眠っているのに、未だ開いていて、張達が己の行動を「詫びた」ら返事が無い。よく見たら眠っていた。・・・とガイドの蔡さんがマイクでしゃべっていた。

武侯祠の一番奥まったばしょにある孔明殿、諸

葛孔明像は高さ2メートル

ここは「静遠堂」とも呼ばれている。右の像は

孔明の子

文字は郭沫若の筆

成都市内の武侯大街にある。西晋末年、成漢李雄

が三国時代の蜀の名宰相諸葛孔明を記念して建て

たもの。

唐代にはすでに名所旧跡として広く知られていた。

明代初期の改築の際、劉備を祭る「漢昭烈廟

の中に移され、君臣二人を一緒に祭る祠となった。

三絶碑と呼ばれる唐碑は特に有名。

武侯祠の構成は、大門をはいって第一門までの空間が「柏森森」の森である。

林の間をまっすぐ行くと、第二門があり、**第二の空間**なっている。

正面に劉備をまつる劉備殿がある。その左右は廻廊になっている。



劉備と「桃園結義」

字は玄德、年二十七歳、州郡の城に出て、有士募集の高札を見た。

長歎して去ろうとすると、後ろから大声で声をかけた者がある。その人、

身の丈八尺、豹頭環眼、燕頰虎鬚、すなわち張飛である、字は翼徳。次いで

関羽、字は雲長があらわれる。身の丈、九尺五寸、鬚の長さ一尺八寸、丹鳳の眼、

臥蚕の眉。

ここで、互いに義兄弟になろうと言い合つが、飛飛の提案であす桃園で行おうと

いうことになった。

飛曰く、吾莊ノ後ニ桃園アリ 花ヒラキテ正ニ盛りナリ、明日、マサ二園中ニ於

イ

テ天地ニ祭告シ、我ガ三人、結ンテ兄弟ト為ルベシ。

「互いに姓を異にするが、兄弟になった以上は、同心協力、救困扶危しよう。同年同月同日に生まれなかったことを、いま望んでも仕方がない。しかし同年同月同日に死のう」と誓い合った。

こうして、三国志物語の三人の主役は誕生した。

三国志の物語は魏の国の曹操とその係累（敢えて部下としないのは曹操死後も魏は続く）、呉の国の孫権とその係累、そして蜀の国の劉備・諸葛孔明とその仲間達、それぞれの登場人物たちの魅力と、三つの国がそれぞれに知恵を絞って、生き残りの競争に鎬をける物語である。

我々は日本の作家の解釈で読むわけだけど、その下敷きになっているのは「三国志演義」なのである。いくつかのハイライト・シーンもさることながら作家の主観でとらえた登場人物に我々読者も鼻唄や嫌いが生じるのは止む得ないことではある。

僕は次々と登場しては消えていく多くの英傑の中で、異民族の血を引いた騎馬の長・马超（176〜222）字・孟起にとても惹かれるものがある。

涼州（今の敦煌を中心とした砂漠地帯）の錦马超のストーリーは、ときに三国志の世界とは別の世界にいるような壮大な気持ちになるのである。

西域という、からっとした大地が舞台のせいかな、それとも、主人公が権謀術数の世界から、かけ離れた乾燥した？性格から来るからなのか分らないが、马超はほくにとって、胸のスカットとする豪傑なのである。

絡みの相手漢中の五斗米道の張衛も同じく好きなキャラクターだ。

.....
廻廊をめぐる、関羽、張飛、趙雲といった武将や法正など文官の塑像を見て、正面の劉備の金泥の像を見ると、当然のことながら、皇帝の衣服をつけている。

彼の64年の生涯のうち、最後の三年間だけが漢（蜀漢）という短命な帝国の皇帝であった。

かれはその最晩年、関羽の仇をうつとということで、みずから大軍をひきいて蜀を出た。

劉備はいくさが上手ではなく、しばしば破れ、ついに長江の峡谷にある白帝城に逃げ込み、ここで病み、やがて没した。

当時、孔明は成都にいた。

病床の劉備は孔明を枕頭に呼び、遺言をした。この遺言は正史である「諸葛亮伝」に出ている。当然、その場に記録係の史官もおり、他の側近もいたろうから劉備としての公式発言であり、事実であつたらうと思われ。

「.....君の才能は曹丕の十倍ある。かならず国を安んじ、わが理想であつた漢を復興するだろう。我が子の劉禪については、これを補佐するにあたいするならそうしてやってくれ。そうでなければ君が取って代わつて蜀漢の皇帝になつてもらいたい。」

劉備殿を過ぎると、第三の空間に入る。奥の院というべきところに諸葛亮殿が建っている。孔明は文人でありながら武将を兼ねた。しかし戦場にあつても身を甲冑でよろごうとはなく、装飾を一切つけない輿に乗っていた。

頭には葛の繊維でつくつた葛巾という粗末な頭巾（当時、野人や隠者のかぶるものとされていた）をかぶり、手には指揮のための羽扇一本持っているだけで、身に寸鉄も帯びていない。この塑像も記録のとおり姿である。

彼の最後の戦いは、四度目の北征であつた。五十四歳、五丈原に布陣し、敵と対峙しているうち、その八月に病死した。

杜甫草堂

杜甫（712〜770）はいうまでもなく盛唐の人で、中国に於いては古今第一の詩人とされる。李白は詩仙と呼ばれ、杜甫は詩聖と呼ばれた。

科挙の試験に合格せず、諸所に漂泊した。ついに、妻子をつれて、食を求めて鳥も通いがたいという蜀道の嶮を超えて四川のこの成都に流れてきた。唐の759年の12月、杜甫四十八歳のときである。

彼は成都郊外に小さな草堂を結び、ひさしぶりに垣の内にあんずる暮らしを得た。

杜甫の生涯で、成都時代の数年こそ、もっとも安楽であつたといえる。

こんにちには、杜甫は中国最大の詩人であると言つて評価が確立しているが、在世中一部の文人筋から高く評価された外は盛名をつるに至らず、死後認められ、特に宗代以後、圧倒的な尊敬を受けるようになった。

杜甫が諸葛孔明の廟を探し訪ねていく詩「蜀相」の詩は有名。

丞相ノ祠堂 何ノ処ニ力尋ネン

錦官城外 柏森森

措ニ映ズ碧草自ズカラ春色

葉ヲ隔ツ黄ウリ空シク好音

三顧頻繁タリ 天下ノ計

両朝開済ス 老臣ノ心

出師 未ダカタザルニ身先ズ死シ

長一 英雄ヲシテ涙 襟ニ満タシム



出来れば、あと2ヶ所ほど回りたいたいところがあった。特に望高樓公園の竹公園は是非見たいところだったけれど、あいにく「道路が混んでいて、時間がかかる。」との運転手の弁でとりやめた。

「この運転手、もしかして、成都をよく知らないんじゃない。」同じ所を何回も廻っているが「記憶力抜群のピーカン氏が言った。時計はめがてら時間をストップして待たせずホテルに帰ってゆっくゆっくしてから(皆で夕食に行きましよう。という)になった。」

ピーカン氏と話して「そっだ、昨日の彼女たちと成都の街を案内してもらい、夕食でも馳走して、そのあと、カラオケなど**センガヤン**如何なもんだろう(「僕が携帯で話をする。という)ことになった。幸いケイタイ番号は昨夜訊いていた。……通じるだろうか? 初めての電話会話……教材で習った時も……」

から勉強しておくのだった。確か「ウェイー!」もしも(「で始まるんだけ……(つぎ)10000番の電話の前でこぼしシユミーションに付ける。そして静かに受話器をかけた。

旅低頁 蛎 式純 宅心

ウェイーニシィ チン シャウシエ マ

匣頁 寄墳。峡 阻心 貫 晩云 栖器。

ウォ シィ ダァシィ。 ドンラ 。 ツォン リバン ライダ。

低 嘘 扮寂 宅心

ニィ ヨウ シィシエン マ。

面倒なので後はほんな翻訳できます。

「シンティエン ワンシヤン ヨウロンマ(今夜、暇ないの?)」

書爺 絡貧 嘘 腎 宅

ウォ シヤン チン ニシヤオ チィシエ コウイィマ?

我 想 清 ? 材 去 街 可 以 ?

(なければ、今夜、成都の街、案内して欲しいんだけど。)

イチィ チィハン チュイ センモヤン!

一起 っ飯 去 っっ(正式には……突担)と書く。

ウォ チン クォ……(僕がおごるよ。)

我 っ 客 ……とても長い電話だった……。

僕の貧しいヒヤリングの力によれば、陳 小姐の答えは次のようなことだった。

「アラ……」メンナサイ。ワタシモ ヲテモ ヲテモ イキタイ アナタチ ワタシ

ダイ

スキ テモ (真 遺憾……)シエン イーハン(トテモ サンネン アリマス。

コンバン ヤクソク アリマス パート ショクシ スル コトワレナイ (僕が断れ、

大事な用が出来た。と言えと言った) ホーティエン(あさって)アタシ ヒマアリマス

(バカヤロー……あさってはは川の上だぞ。)

イーハン! イーハン! イーハン! ……

「なんちよ……イーハンって、麻雀をしいって、と言っているの?」

かくて、予定が外れてしまったピーカン氏は夕食まで「僕はネルヨ」と言ったか言わないうちにもつ、いびきをかいていた。僕はひとり、夕食までの1時間ほど、成都の街の散策に出かけた。

僕等のホテル天府喜来登酒店(成都シエラトンホテル)は成都市のまさに真ん中、人民中路の一段・市体育中心の横にある。

道幅が広いので大きな歩道橋をわたりテパートの多い在春照路をぶらつき、ほどなく行くと太平洋百貨が目に入った。以前、どなたかのホームページで、この玩具コーナーにとても怪しい(面白い、と言った程度の意味です。)玩具が沢山あった。と書いてあったのを思い出したので、行ってみることにした。エスカレーターで一樓から五樓(階のこと)まで、つぶさに見たつもりだが見つからなかった。

玩具という単語が中国語でどうしても考え付かず(はっきり言えば知らなかった)訊くことが出来なかった。

Tシャツが出てきてしまったので、いつも離さない筆記具もなく、果たさずにテパートを出た。

……そして、夜にの晚餐会と相成っ

た。・・・・・・・・

どこのレストランで食事をしたのか、何故か？覚えていない。多分、「陳麻婆豆腐本店（ホテルのすぐ近くにあるのだが）」に彼女らと行けなかったのが、悔やまれたからだろう。

結局、この夜は皆さんと一緒に麻婆豆腐の唐辛子にヒィヒィ汗をかきながらそれでも結構楽しい、笑い、笑いの晩餐会でありました。

添乗員のFさんが出される毎に一品一品、菜（中国語で料理のこと）を説明してくれ、一同、頷きながらも、最初の箸つけは、勇気のいることです。

いつのまにか趣向が分かれてきて、グループ化するの不思議なものです。Fさんは一年ほど北京に留学滞在の経験があるとかで、日常会話はもうチャイナピープルでした。

かくして、2日目の夜はカラオケで日中交換が出来ず、密かに練習してきた「昴」も「北国の春」もおくりでした。現地テレビを観ながらの静かな夜が更けていきました。

2日間の短い成都だった。多分又、近い未来、この街を訪れると思う。

この街を離れる前に現地ガイドの蔡サンが説明してくれた成都の関連コメントをメモから思い出し書きしてみよう。

なかにはオンボロボスの揺れがひどく。キーワード1個、やっとメモれたのもあり読み返してみても判別困難なものけっこうあった。

●この街の人々は芙蓉の花がトテモ好きで、7月に満開になる。城を蓉城と呼ぶ。

●本当はシルクはこの街でとれる。西安に集められて加工され、西国に運ばれて行った。だから昔からこの成都の街を別名 錦市（シルクの町）と呼んでいた。

●中国の漢方薬の70%は四川省でとれる。周囲をやまで囲まれているから、又、漢方薬専門の大学が五つもある。

●1890年ごろ、この町の安順橋のそばに、姓は陳、愛称が麻婆（あばたのお婆さん という意味）というあだ名の婆さんが住んでいた。

彼女は豆腐を作って売っていたが、簡単な惣菜も売っていた。当時、成都の街の労働者は、昼時になると、麻婆の店で昼飯を食った。その婆さんが発明した豆腐料理は美味しく評判になり、ごく自然に「麻婆豆腐」と呼ばれるように

なった。

大足

窓からまぶしい陽が差し込んでいた。

「蜀犬、日に吠ゆ」のことわざが浮かんだ。いい天気だった。

四川の犬は、太陽を見て吠えるんだそうだ。生まれてから、地球のすべてが曇天であると信じて生涯を終える。まれに雲間から太陽がのぞくと怪しんで、吠えるというらしい。

司馬氏の「街道をゆく」によれば、……すでに唐の中期の文章家「韓愈（768～824）」が使っていることを知った。

見聞や見識のせまい者が優れた言行に接したとき、それが理解できず、疑って怪しむ、攻撃することをいう。韓愈は蜀に来たことがなかった。彼がそういう喩えを使っている以上、蜀の雲霧のはなはだしさが、知識としてひろく知られていたにちがいない。・・・・・・・・・・・・・・・・

「今回、唯一の世界遺産ですから」とFさんが力説してたが 個人的には仏像はあきあきしている。タイで、シヨグジャカルタで、敦煌で、シルクロードで、西安で観てきた。信心が足りないのか？

大足の名の由来は、宝頂山の崖の池底にあるとい2mもの足跡から。釈迦が西方浄土に上る時に残したものとかが。

石刻が全部で13カ所あり、大仏湾の摩崖物が代表的。南宋の名僧、趙智鳳が1179年から約70年を費やして完成させたと言われ、500メートルに及ぶ岩壁に31の石窟がある。

釈迦涅槃像（31m・上、写真）は有名。六道輪廻像や1000本の手が彫られた千手観音、など仏教説話が系統的に造像されている。

ガイドの蔡さん（重慶市）の話だとこの寺は大乗仏教だそうだ。随分長い時間、大乗と小乗仏教についての説明があった。また、仏教と道教についての、違いなどを延々と語っていた。

はつきりと自信はないが、道教は、現世のうちに長生きしよう。そして、懸命に修行をすると、道士(坊)から仙人になれるのだとつた。仙人になったら、空をとへ、海の上も歩ける。不老不死となり、死ぬことがなくなる。

……とかなんとか。

大乘・小乗の乗とは乗り物つまり「教え」のことだそうです。

小乗仏教とは「煩惱をなくす」ためには「出家」つまり、妻子、職業、身分すべてを捨てて、修行の道に入らなければいけない。

(世捨て人になる) 人間は個人的な悟りに満足している小乗の修行の完成者を羅漢(らんかん)といいこれは自覚というのです。

一方、大乘は他覚で菩薩になりそして死ぬと仏になる……チョット意味が不明。

坊様に聞かないと……
ともかく

大乘仏教は「煩惱は持ったままで幸福になれる」という教えです。つまり、世俗の中で生活していながら幸福を得られる。さて、どのような方法でそれは得られるのか？それは、「空」……こだわりを捨てること。と、「中道」を極めることである。

さて、それでは大乘仏教の根本精神である「中道」とは一体なんだろう。

ひろさちや氏の仏教百科から引用するところとなります。

…… 釈迦は入滅の直前、弟子たちに次のように遺言しています。

「わたしが亡くなったあと、あなたがたは自分自身を灯明として、わたしの教えた法(真理)を灯明として、急らず精進しなさい」と。

これが、有名な「自灯明・法灯明」……の遺言です。

釈迦の生前、釈迦がこの世照らす光明でした。しかし、釈迦の入滅後の暗闇の世界を歩くには、わたしたちには灯明が必要です。

その灯明が「自灯明・法灯明」なのです。釈迦の教えた真理(法)を灯明にするだけではなしに、自分自身を灯明にせよ。と遺言したのです。

換言すれば、それは、各自の「いい加減」を見つけなさい。ということなのです。

中道とは……いい加減なのです。

中道は……ゆったりとした真理の大道です。

中道は……結果にこだわらない歩みです。

私達は悟りをめざして歩みますが、悟りそのものにこだわると、中道は歩めません。登山するのに、頂上にこだわってがむしゃらに登るのは中道ではありません。

本当の登山は、一歩一歩あたりの景色を楽しみつつ登る、登り方です。

仏道(中道)を歩むのも同じで、到達点(頂上)は忘れ去っていいのです。

こだわらずに一歩一歩楽しみながら登ること……それが大乘仏教の生き方です。自分にふさわしい登り方、それが「中道の精神」だそうです。

21世紀は「このころの時代」といわれている。自灯明とはまさに自分の「このころ」の持ち方が大切だといっているのだろう。

「中道」とは、普通と解釈してもいいのではないか？

「優れず、劣らず」「富裕すぎず、貧すぎず」「早すぎてもなく、遅れるでもなく」生きる、ということとは、「がむしゃら」ではつまらない。

せっかく、この世に生を受けたのだから、「たのしみ」ながら生きようではないか。まあ、こんな風に乗大乘仏教の根本精神を、自分の都合のいいように解釈したきらいがあるが、これも、年輪を重ねた今、言えることで、若いうちから、「目標」や結果など、こだわらずに、人生、いいかげんに生きるべし」では若者のフリーター志向を増長させるばかりのような気がする。

思うに……中道とは「このころ」の持ち方であって、「自灯明」とは、自分の力で灯をつけて、暗闇(人生と言っ荒波を)生きていくこと、他人に頼らないで生きなさい、と言っているのではないだろうか。

そして、その場合でも、それに100%かけるのではなく、「このころ」はいつも、余裕をもちなさい、「きびしさ」も「たのしみ」に思えるように「いいかげん」の気持ちくらいがいいんじゃないかと、解釈すればどうだろう。

自分自身を、もっと、客観的に眺められるように、余裕を持って生きなさい。

そんなことではないでしょうか。

僕としては、仏教のコトバや、お釈迦様の教え、そして、歴史上の有名な教祖だ

ち（わが国も含め）の「教えや、遺した言葉」を自分流に解釈して、納得したり、反論したり、それはそれで、結構面白い。

そう思えばアジアの遺跡やお寺を訪れ、ガイドのうんちくを聞くのも、楽しいことである。最も、その場合こそ、「中道」の精神で聞くことを忘れてはならない。

成都〜重慶市ノ間は約400キロある。

先ほど立ち寄ってきた大足は重慶市に入る。400キロというところ、鹿児島から九州を出て山口県まで走る距離である。

高速を走るわけだが日本の高速とは訳が違う。まあ、信号が無いというのと、制限速度が100キロを超えると言っぐらいで、快適性は保障出来ない。

結構揺れる。冷房でも効かなかつたら怖いものがある。

トイレ駐車場のドライブインも充実していない。いきおいガソリンスタンド停車になる。

従ってトイレ事情が悪い。

僕らは大足を午後3時に発ち、高速にのった。予定では重慶（チョンチン）着は午後5時くらいである。

好事魔多しの譬えは当たった。交通事故に遭遇したのだ。

大型トラックが見事に反転していた。あたり一面布袋が散乱していた。大型のクレーン車が横にいたから、道路脇に運んだのだろう。

何とか一車線だけは通れるようになるまで、およそ1時間は待たたろうか延々何キロの渋滞だったのか。まあ、1時間程度で「よかった。よかった」と蔡サンが言っていたから、まだ長い時間停車もあるのだろう。

トイレに行きたい人はどうするのだろうか？・・・ふと、想像してしまった。

重慶に来る前に抱いていたイメージがあった。

「地球の歩き方」他のガイド雑誌から受けたイメージでだったけど。それは、街としてはプラスのそれではなかった。

一つ、山城と別名される狭い、坂の街である。

一つ、人口1500万人の中国一の人口密集地。

一つ、いつもどんよりしてて、空気が悪い

一つ、観光としてみるべき所がない。

一つ、自転車は殆ど無く、足としてはロープウェイである。

・・・確かに重慶は坂の街だった。

僕等の泊まるホテル・マリオット（万豪酒店）は重慶一の五つ星ホテルだそうだ。

しかし、部屋がそうなのであって、名物の火鍋はホテル・ホリデー・インがナンバーワンなのだそうだ。「今日はその火鍋が夕食です。」と蔡サンが自慢げに話していた。

時計はもう8時近くを指していた。

ホテルの前に「まず、夕食」ということになった。

途中の高速での事故のため予約時間が来てしまったのだろう。

「確かに火鍋は美味しかった。し、トテモ辛かった。特に真ん中の田筒の中は、辛さに弱い僕にとっては、もう絶対無理な味でした。それより、今夜の按摩会話レッスン（はどうしようか？時間があれば、夜の街の散策ウォーキングもしたいし、・・・そんなことを考えながら、名物の火鍋に舌鼓を打つことでした。

食事はナンバーワン「火鍋」



ホテル・ホリデーイン。

街歩きはピーカン氏と共に、私達の街づくりのための参考に必要なので、出来る

限り二人で繁華街をブラブラしよう、というのが今回の目的のひとつでもありました。

いまのところは、今度の旅は何故かついていない感じです。

それでも、何とかホテルにいたら、荷物だけ片付けて、F氏、K夫妻、ピーカン氏五人で街に出かけた。十時少し前だった。//これは正確である。

実は、中国の古典曲のCDを2、3枚買いたいと思っていた。眠る前に聴くと、とても気持ちよく眠れる。アルファ波が出るのか、喜多郎のシルクロードより効果がある。

飛び込んだデパートに客が殆どいないので入り口の服務員に訊いてみた。

あわてて時計を見たら10時前でした。

それにしても重慶の繁華街にはビックリした。

広い、綺麗、賑やか、華やか、落ち着き、楽しさのすべてを備えた街に見えた。

中央の十字路（シーズールウコウ）の広さはどうだ。

南京路より広いんじゃないだろうか。

あちこちにモニUMENTがあり路上にテーブルでは、若い女性たち、家族連れ、いろいろなグループが、この時間でもいっぱい居た。

特に道路幅の広さ、（ゆとりともとれる、）には天文館と比較して羨ましい限りだ

った。でも、もしかしたら、この感動は本物ではないのかも、と、今、冷静に思い出してみると感じてもある



。余りにも、先入観がマイナス側だったからじゃないだろうか？

思いのほか重慶の街は綺麗で賑やかな街だった。というのが本当かも知れない、しかし、街というのは、どうだろうか？住んで楽しい街がいいのか？訪れたとき感動

を与える街がいいのか、両方なのか？マア、ゆっくり考えるとしても、この時間に（10時）この賑やかさはやはり、尋常ではない。

天文館は八時にはもう暗い。

マリオット・ホテルのフロントで案内係りの小姐（シヤウジョ）に訊いた。

「アンモア サイ ナール シィ ロウ？」（按摩は何処（何階）ですか？）

「チイロウ（7階）」と言ったようだった。

でも、どの案内板にもエレベーターは1〜3階までと、8階（部屋）からしか書いてなかった。

目指す七階は一体、どこへ消えたのか。一瞬、心魔法学校へのホームがなかなか見つからないハリポッターの心境になっていた。

実は、全く別の建物繋がってはいるけど、にあった。ドアを二つ開けて行く目指すエレベーターはあった。七階でエレベーターは止まった。

男の服務員（マネージャーのこと）は言った。

「200元 45分」 「アアル バイ クワイ スウシィ ウウ フェン」

僕は尋ねた「ファンシエン クオウイィ マ？ ドウシヤオ チエン？」

部屋でお願いしますか？ そくていへんですか？ 「ファンシエン、ウバイ、クワイ」（部屋は500元・8000日本円）

「何ッ！按摩が8000円！！」今夜は会話レッスンは中止だ。五つ星にしなければよかった。日本でも一緒である。冷蔵庫の中も、ミニバーも高級ホテルは高い。

タイクィーシューなのだ。



・・・重慶には名物（重慶火鍋）はあっても、みやげものがない。
人口1,500万人を越す中国一の大都市に観光客の買って帰るみやげものがない。もっとも、成都市にも名物（麻婆豆腐）はあってもみやげとしては、漢方薬しかない。

シエラトンホテルの広い玄関フロアにもルイビトンのショーフロアはあっても他は何も無い。大きなビジネス・チャンスが眠っている。

味の素のテレビ・コマーシャル、和田アキ子の麻婆豆腐の唄が聞こえてきた。

・・・そんな中、重慶で皆が買いたいものがあつた。

ガイドの蔡サンが自慢していた井塩である。

井塩は成都と重慶の中間にある町 **井研**（スーゴンの名産である。） 白酒と世

界の三大恐竜博物館が有名だけど本当は井塩がもっと有名なのである。
自貢ではすでに紀元前250年頃には塩の生産が行われていた。

井塩と呼ばれ、地中にある塩分を多量に含む石灰岩を掘り出し、精製するものだ。
清の時代には年間30万tという井塩を生産し、塩都とも呼ばれていた。現在でも生産量では全国の40%を占めるそうである。

蔡さんが「トテモ美味しい。」と言つのと、石灰岩から精製する。という説明に惹かれ、皆密かに「出来れば買いたい。」と、思っていたらしい。誰かが「蔡さん、塩を買いたい。」とバスの中で言ったから、突然、コーラスになった。

「塩だ、塩だ、・・・塩を、私しも・・・塩だー!・・・」と。

食事が済んで9時が過ぎていた。

坂の途中のスーパーに案内してもらつた。客は一組か、二組しかいなかった。
蔡さんがそのマスターと何やら話していた。「塩は無いぞうだ。皆、ガッカリしていた。」

しばらく、他の品を見てるうち、店の店員が念願の塩を籠に入れて運んでいた。

たちまち、レジに行列ができた。一個、10元（165円）だぞうだ。5個、7個と、買っていた。当然、僕も3個かった。安いので、もっと買いたかったが、重くなるので我慢した。ピーカン氏は買わなかった。

二人は早めに外へ出た。すると、何人かの女性が例の塩の入った手かごを走りながら向こうから来る所だった。

突然、ピーカン氏が「幾らで売ってるか、僕が見てくる。！」韋駄天のように女達の元店に走つた。・・・しばらくすると、彼が笑いながら、手に例の塩を3個持って帰つてきた。

「幾らだったと思つて?」「・・・」3元（48日本円）だったヨ。「三
倍ぶっかけている。という原則はここでも証明された。」

沢山買い込んだ皆さんには言えず、バスの後ろで、二人して大笑いだった。

何だぞう?実は象牙でした。

ピーカン氏がマンモスじゃないですか、と訊いたら

「違う、象だ」との答えだった。

三峡ダム工事を肌で感じる公園ツアーの感想。

船からおりて、オンボロバスに乗り、工事現場を見下ろす観光公園へ向かう。

壮大なダム工事なので、さぞ、スケールのでかいことだろう?そんな程度の思いだったので見終わってからさほどの感動というか、印象はない。

現場自体がはるか遠方であつたせいかもしれない。

それとも、自然の壮観に魅了されすぎたせいもあるぞう。

ただ、ダム関係専用の大型トラック（特殊なナンバープレートをつけている赤枠

のついた)のが砂塵を巻き上げながら、次から次へと行き交うのが印象に残る。資料館の殆どを占めるかのごとくデカイ、ダム模型を取り囲んで、ガイドたちが、それぞれの案内客の国籍に合わせた言語が飛び交っていた。

結局、俯瞰模型は全然見なかった。

→ 時間30分ぐらいのツアーだった。一人500元らしいけど、白帝城がキャンセルになったので、料金はいいとのことらしい。(添乗員F氏の説明)
今夜は最後(といっても日田だけ)のパーティが八時から三樓会場にて、壮大に行われます。との、アナウンスが船に戻ったら入った。

夕食後、お別れパーティは始まった。

楽しい、国際交流の場だったが、ここに載せて紹介しても、場に居なかった人には結構つまらないものである。だから、簡単にプログラムのみ紹介する。と・・・

- 主催の船側からの、歓迎の民族踊り。
- カナダ・アメリカ客の「コーラス」全員紙を見て歌っていた。準備はさすが。
- 我々、日本人2名・カラオケで「星影のワルツ」を合唱。

本当は、「さくらさくら」にしたい、いや「スキヤキソング」の方が晴れがする。か、他、数曲、候補が上がったが結局こちらでも人気があるということ。で「北国」の春「かこれか?」ということになった

- 台湾グループは格好いい夫婦客が「デュエット曲」を絶唱した。
- 主催側のコント。爆笑!!!
- 全員参加の相手の肩に両手をのせ坂本 九ちゃんの歌に合わせて踊る。
- 椅子とりゲームではわが日本代表・菊地夫人が優勝!!!大和なでしこは伝説に過ぎなかったことを証明してくれた。

● 照明が落ちて「ダンスタイム」になった。
ルーシーこと小陳が目に入ったので、ウィンクして誘った。シルバを踊った。

船の旅は思ったよりずーっと楽しいものだ

→ 10時頃、ピーカン氏と二人で4樓の按摩室前にある印鑑を作ってくれるコーナーに行く。朝、頼んでいた刻印をとりこ。

チョットしたトラブルが発生した。ピーカン氏が出来上がった印鑑を見て、突然、言ったのである。「ジス イズ シャチハター!!! ノーグッド。」そして、突然、

後ろに下がって、相撲の四股をして見せたのである。

僕もよく経験する、センスのない彫り師なかと名前が印鑑の中に収まり、

それはまさにシャチハタ印そっくりになるのだ。

相手の言い分はこうだ「書体は聞いたけど、縁に文字が付くことまでは聞いていない。この石は水晶で硬く、の時間彫るのにかかった。」と・・・

・・・結局、彫り直すことで収まった。これが、船の中じゃなかったら、争いの嵐は

しばらく収まらなかったに違いない。思いで多いリングならぬ印鑑はピーカン氏の話だと「息子へのプレゼント」だとか?

いつか、見せてもらいたいとおもっている。この日の思い出と共に・・・西陵峡は瀬が多く流れの早いことで知られている。

久々に二人で記念撮影。

最後尾には、中国国旗がはためいていた。



船に戻りしばらく経つと船は西陵峡へに入った。
ピーカン氏と二人、「今度は今度は後部デッキからみて見ようか?」と言いつつこ
なって

後へ向かった。随分広い甲板で気持ちが良かった。

私たちのクルーです。

揚子江総統4号



蔡さんの説明によると、
「舟をこいでる(引く方が
多い)人は4人、他に舵取
り、前で進行役など
合計10人くらいで、一艘
を担当してるそうだ。皆、
土家族といい、少数民族たそうである。
ロープで舟を曳いて(底が浅いので)行く。結構、カ



んだ、と感心した。

往復だいたい二時間かかる。とのこと、途中、絶壁の中ほどに石棺の置いた穴が
見える。

蔡さんの説明が「あそこです。アしは違います。・・・」と結構、しっこい。聞
く方がしっこいのか、よく分らない

僕にすれば、どれでもいいって感じてました。それより、水や眺めの方が感動。

ビックリしたのは終着点(?)の瀬に、例によって、露天みやげ物屋が30店(机
だけが)は並んでいた。

ことだった。早速、会話のレッスンと好奇心から、石ころ(川底の)を選び、数個
5元で買った。今、店の金魚ケースの底にある。ピーカン氏も、なにやら、玉のペ
ンダントを買おうとしてたら、

落としてしまって、割れた途端、買うのを止めた。売り子の小姐が、一生懸命であ
っただけに可哀想だった。

ピーカン氏も「そう、思ったらしく」小銭を探したが、
ポケットに無く、やむなく離れた。

後を小姐が、なにやら叫びながら、声だけがいつまで
も追ってきた。

かくて、僕達の新農溪ツアーは終わった。

帰りの小舟の中でガイドの小姐の民謡の披露があ



った。アカペラで哀愁を
あびた声は今も僕のパン
コンの中にある。

達も同じくらい」との話だった。中国の平均的労働者報酬が月平均・350元から
400元

(日本円で6000円程度)だとしたら、彼等の収入は倍くらいで、結構いい仕事
じゃないか?

といったら、ピーカン氏曰く「実際に、

一ヶ月に働く日数は10日から15日くらいじゃないの?15日掛ける400元だ
と、600元、

そんな所でしよう、か?」との計算をだしてくれた。商売人は常に、頭は計算機な



